

平成27年9月6日(日)

しもみずしいせき

下水主遺跡第8次調査現地説明会資料

調査場所 城陽市寺田今橋

調査期間 平成27年4月24日～平成27年9月29日(予定)

公益財団法人 京都市埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都市向日市寺戸町南垣内40-3
URL <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

1. はじめに

下水主遺跡は、木津川によって形成された微高地やその後背湿地に立地する南北約1200m、東西約540mの範囲に広がる縄文時代から近世にかけての集落跡です。遺跡の周辺には、水主神社東遺跡や水主神社遺跡、水主遺跡、水主城跡などがあります(第1図)。

下水主遺跡は、隣接する水主神社東遺跡とともに、新名神高速道路整備事業に伴い、平成23年度から発掘調査を続けています。これまでの調査では弥生時代後期の竪穴建物や古墳時代の大規模な溝、古代の掘立柱建物、中世から近世の島畑などが見つかっています。

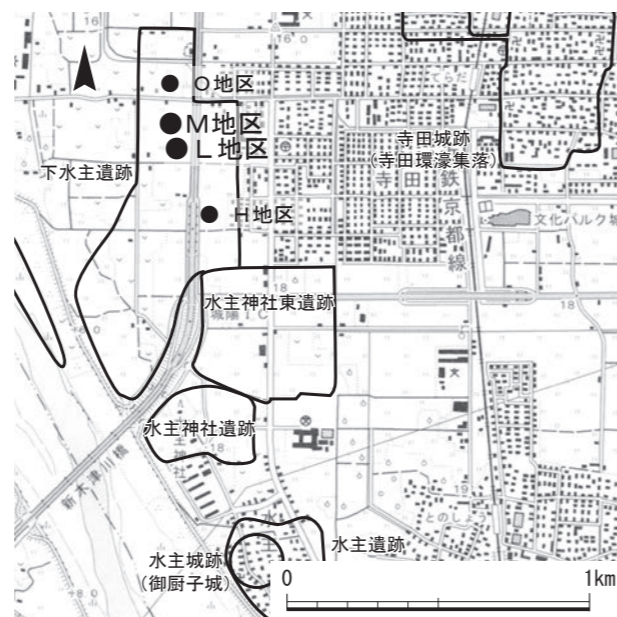
今回の調査は、下水主遺跡の第8次調査にあたり、遺跡の北端部L・M地区で行いました(第2図)。

なお、平成26年度に下水主遺跡第6次調査として西側で調査を実施しており、合わせて報告します。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代から中世にかけての遺構を検出しましたが、ここでは、おもにL地区で検出された縄文時代の遺構・遺物について報告します。

調査区南辺で、縄文時代晩期とそれ以前の氾濫流路NR38・42・60の3条の流路跡を検出し



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(1/25,000 宇治)

ました。これらの流路跡は、流路内の砂礫の堆積状況から、河川が氾濫することによって生じた洪水(これを「氾濫流」と言います)が、当時の地表面をえぐることによって形成したものと考えられます。このようにして形成された流路は「氾濫流路」と呼ばれています。

氾濫流路NR60 今年度の調査で確認したもので、NR42と重複しています。土層の堆積状況からNR42以前の氾濫流路になります。砂礫は、西から東、あるいは西南西から東北東に流れて堆積しています。土器が出土しませんが、いつごろの氾濫流路であるのかわかりませんが、NR42との重複関係から、縄文時代晩期以前のものです。流路内からは氾濫時に押し流された大小の自然木が出土しています。

氾濫流路NR42 2か年の調査で確認したもので、見つかった長さは約50m、幅9.8～17.1m、深さ1.8m前後を測ります。氾濫流路NR60とは流れる方向が異なっており、北西から流れてきて大きく北東方向に湾曲し、さらに北へ延びていきます。このようにNR42は大きく蛇行しています。NR42の底面では多数の縄文時代晩期の土器のほか、櫛状木製品の未製品が出土しました。また、自然木も多数出土しており、洪水によって流されてきたものが堆積したと考えられます。NR42の中には、木の葉や小枝などの有機物が集中して堆積した層と、細かな砂の層とが交互に堆積しています。何度かの洪水によってこの流路が埋没したことがわかります。

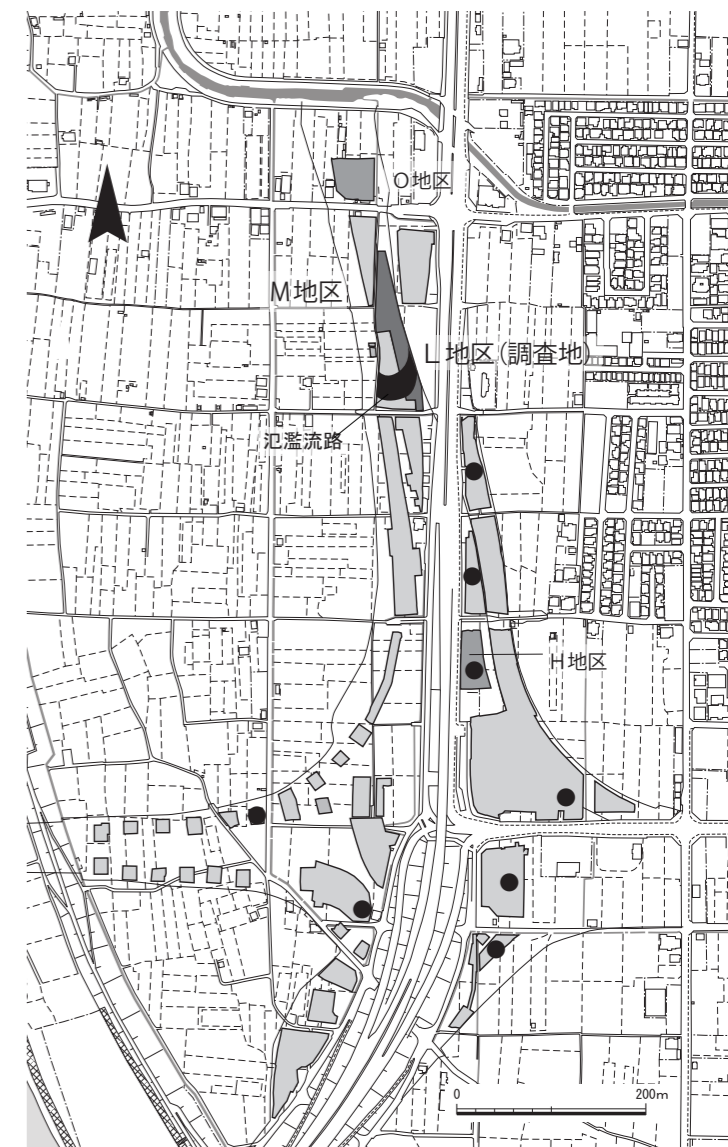
氾濫流路NR38 NR42が埋没した後に、新たな洪水(氾濫流)によって形成されたもので、NR42と同様、蛇行していたようで北へ延びていきます。砂の堆積はNR42と同じです。検出した長さは約50m、幅3.4～5.9m、深さ0.6～0.8mを測ります。昨年度の調査ではNR38からも縄文時代晩期の土器が多数出土しました。

以上のほか、昨年度の調査で、窪地(SX40)から縄文時代晩期の土器が多数出土しました。また、焼土の広がり(SX39)も確認しました。しかし、多数の土器が出土したにもかかわらず、竪穴建物のような住居の痕跡は確認できませんでした。

3. まとめ

2年度にわたる調査で、縄文時代晩期について、大きな調査成果を得ることができました。下水主遺跡の縄文時代晩期の様子についてまとめます。

①これまでの調査では、縄文時代晩期の土器や石器が出土するものの竪穴建物などは見つかりませんでした。今回の氾濫流路NR42からは、多数の縄文土器が良好な状態で出土しまし



第2図 下水主遺跡・水主神社東遺跡調査区配置図(濃い網点が今回の調査地。●は縄文土器の出土地点)

た。出土した縄文土器はあまり磨耗していませんので、西側に近接して存在していた集落が洪水により流された可能性があります。

②下水主遺跡・水主神社東遺跡では、今までに多くの地点から縄文土器片が少量出土しています。その量から集落跡とは考えにくく、木津川流域の低湿地で狩猟や漁労などをしたことが考えられます。

③下水主遺跡・水主神社東遺跡で出土した縄文土器は、すべて晩期のものです。この時期に人々は木津川流域の低地に居を構え、生活空間として利用したようです。しかし、何度かの大きな洪水のため、生活空間を他の場所に求め移動したと考えられます。



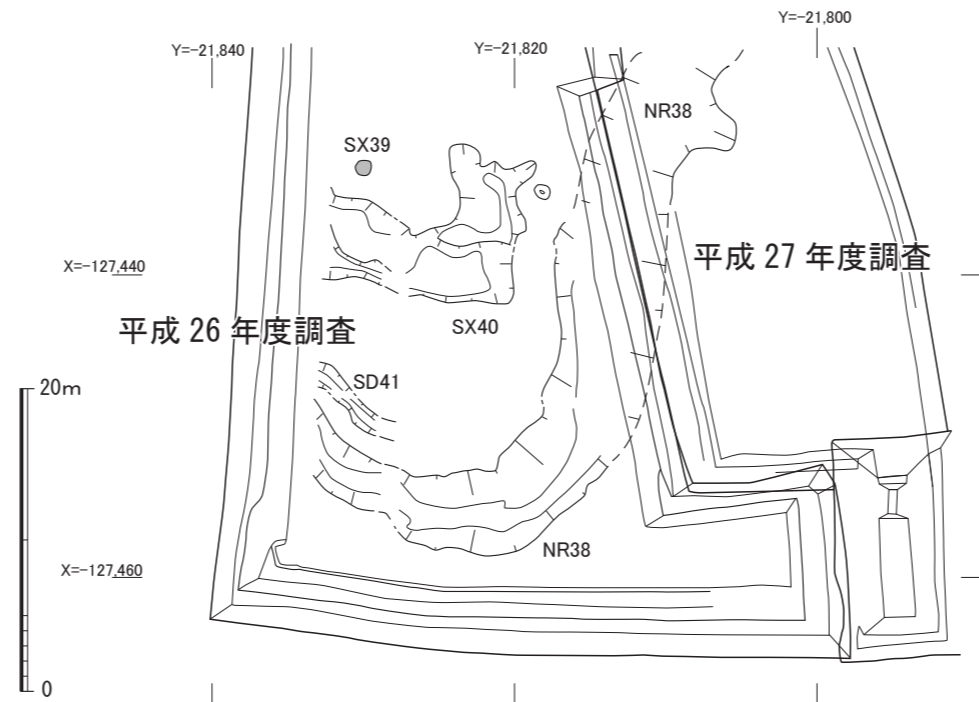
写真1 氾濫流路NR38全景（西から、平成26年度調査）



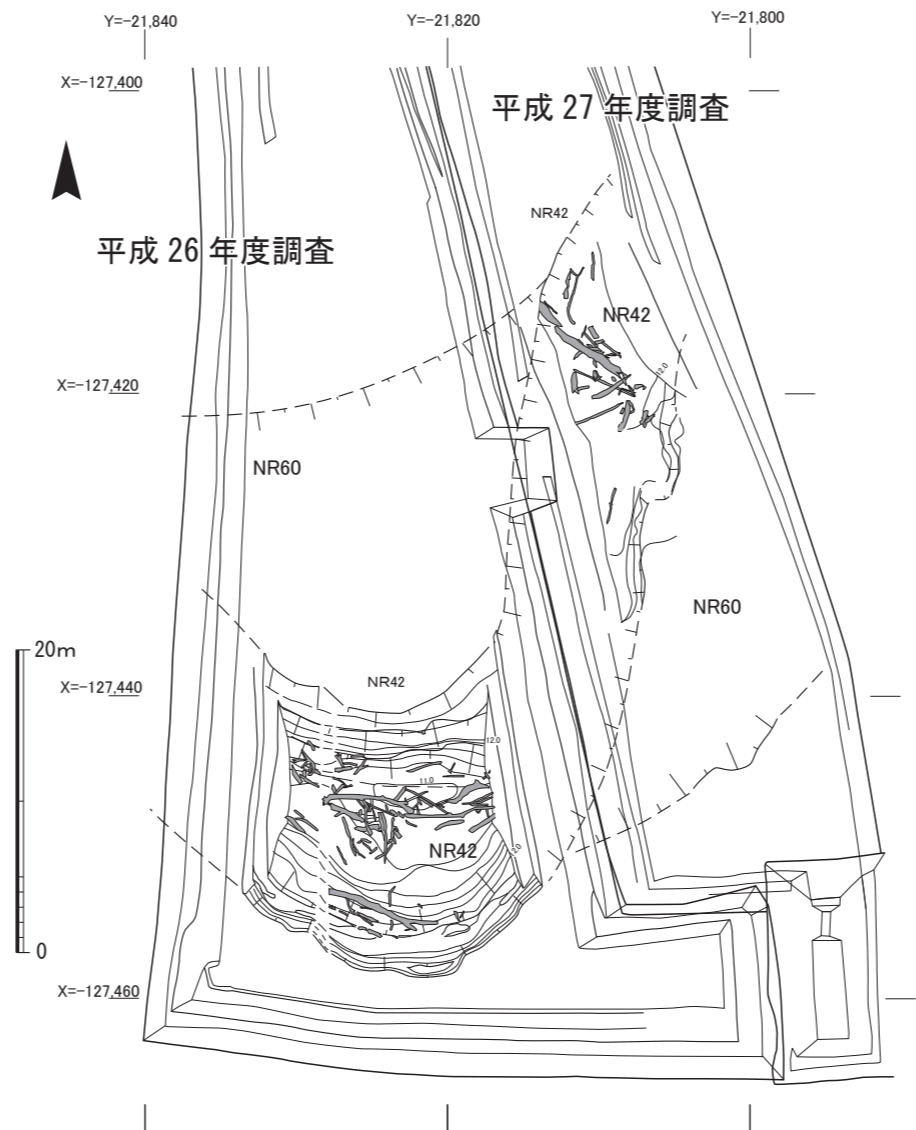
写真2 氾濫流路NR42全景（西から、平成26年度調査）



写真3 氾濫流路NR42 樽状木製品出土状況全景（平成26年度調査）



第3図 氾濫流路NR38ほか平面図



第4図 氾濫流路NR42・60平面図

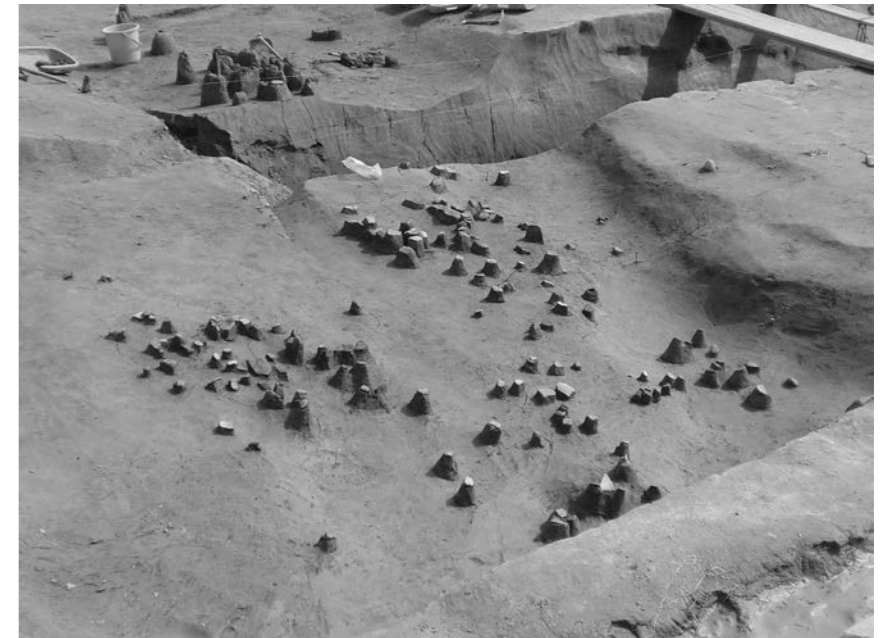


写真4 窪地S X40 遺物出土状況（北西から、平成26年度調査）



写真5 平成26年度調査出土縄文土器



写真6 氾濫流路NR42全景（北西から、平成27年度調査）